

# “こども病院ボランティアの会” web 会議報告

## コロナ禍における活動状況



WEB会議報告事項  
開催日 2022・9・10 (土)

★コロナ禍に「おけるボランティア活動報告者

○沖縄県立南部医療センターこども医療センター  
○都内総合病院小児科看護師A

### 参加施設

- ① 宮城県立こども病院
- ② 埼玉県立小児医療センター
- ③ 神奈川県立こども医療センター
- ④ 千葉県立こども病院
- ⑤ 沖縄県立南部医療センターこども医療センター
- ⑥ 都内総合病院
- ⑦ NPO法人病気の子ども支援ネットワーク
- ⑧ 湘南鎌倉医療大学研究者2名
- ⑨ 公益財団法人キリン福祉財団

第12号 2022/9/30 発行  
事務局 東京都新宿区若松町10-1-302  
☎080-5527-4379 代表 坂上和子  
<https://boranboraco.jimdofree.com/>

## ← 来年1月交流会を開催します

事務局より  
WEB会議の報告事項です。  
★2施設の報告の概要は裏面をご覧ください。沖縄にはコロナ禍におけるボランティア活動の限界と工夫を報告して頂きました。もうひとつは総合病院の小児病棟から報告をいただきました。総合病院にはコ－ディネーターという職種がいっぱいしやらないので小児病棟の看護師さんからの報告です。

★自治医科大学とちぎ子ども医療センターを事務局3人で訪問し情報交換してまいりました。

★新しいメンバーをお迎えしました。千葉こども病院です。

★来年1月交流会についてはちらしをご覧ください。別刷りでも郵送しました。コロナ禍にあっても様々な工夫で病院の子どもたちを応援しているボランティア団体の報告です。ズームと対面で実施します。詳細はホームページでもご覧いただけます。

こども病院ボランティアの会

# コロナとボランティア

これからを考える交流会

小児病院・病棟を訪問しているボランティア団体と、受け入れ側の病院スタッフが参加し、コロナ禍の活動報告、今の病院のニーズや態勢作り、それぞれが考える今後について話し合います。

活動報告者(予定)  
日本ホスピタル・クラウン協会 ボランティアグループにここトマト  
スマイリング・ホスピタル・ジャパン 絵本カーニバル オレンジクラブ

2023年  
1月14日(土)  
13:00~15:30

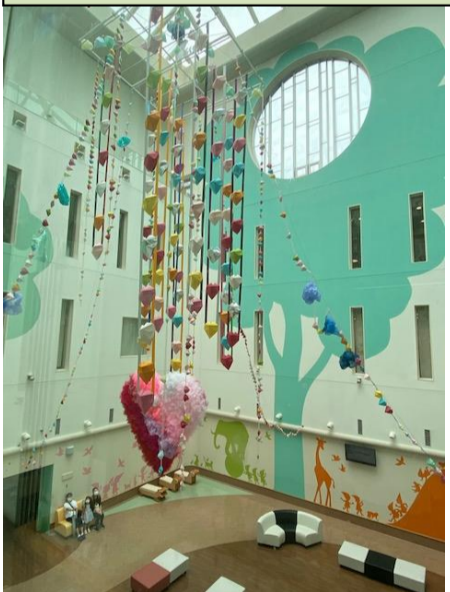
参加お申込みは  
こちらからは  
締め切りは  
1/7(土)

ポスター大募集!  
参加団体のポスターを会場  
に展示し、  
抽日みなさんに紹介しま  
す。

お問い合わせは、  
こども病院ボランティアの会 事務局  
mail: boranboraconokai@gmail.com

神奈川県立こども医療センター-体育館  
会場参加30名(先着順)  
オンライン参加も可能!

## ボランティア活動の視察交流



【自治医科大学とちぎ子ども医療センター  
へ視察交流】  
神奈川こども医療センター 加藤悦興  
7月23日、とちぎ子ども医療センターを訪問しボランティア活動について意見交換をして参りました。最初に目についたのはよく整備されたお庭でした。地域住民の方々の自主活動によるものだそうです。ボランティアは活動年数10年以上の方が約4割で「地域貢献」「病院への恩返し」がきっかけの方も多そうです。コロナ前は、病棟の依頼で病棟夕涼みやクリスマス会等の行事に各病棟5〜6名のボランティアが関わっていたそうです。今は外来・病棟ともに活動は休止だそうです。ボランティアさんからの「何かできることはありませんか」との声がけがあり、コロナ禍でも自主性は上がっているとのことでした。ロビーは3階まで吹き抜けの場所に飾られているモニュメントがありました。その鮮やかなモニュメントは、たくさんの手作りのハートできていました。とても心を打たれる作品でした。院内の案内や意見交換においてはボランティアの方やボランティアコーディネーターの鈴木ふじえさん、小坂仁センター長、加藤貴美子副センター長にも大変お世話になりました。コロナ禍の中でこの視察交流を快く受けて頂き、有難うございました。

## ようこそ「ボランボラコの会」へ

はじめて会議に参加して  
千葉県こども病院 吉野仁子  
当院では、新型コロナ感染症対策として院内でのボランティア活動の制限が2年以上続いています。当初は制限に理解を示してくださっていた方々から「いつになったら院内で活動できるのか?」「病院がボランティアに何を求めているかわからない」「こども達のために一緒に取り組んで欲しいのに病院との壁を感じる」などの言葉が聞かれるようになりました。

現在、一部の病棟を閉鎖して感染症専用病棟を開設しています。感染症に罹患し離脱する職員もおり、コロナの動向や職員の離脱状況をふまえた入退院の調整をこども・家族支援センターの職員が担っています。

また、ご家族からの相談にも対応し、面会や付き添い制限によりお子さんに会えない辛さを訴え時には激怒される方に対し、子ども達を感染から守るための対策であることを説明し対応する日々が続いています。

このような状況の中でのボランティアさんの言葉に、「子ども達のために少しでも活動を拡大したい」という思いと、「病院がたいへんなことをなせわかつてくれないのか」という思いがあり葛藤していました。

そのような時、会議のお誘いを受け皆様の活動を伺いたいと参加させていただきました。

活動報告や皆様の発言を聞いて、子ども達が気持ちを表出できない、自分らしくいられない等の状態に陥っていることが良く分かりました。また、ボランティアの方々に対しても、病院の現状を理解していただくための情報提供が不足していたと反省しました。今後はボランティアさんとの対話を大切にして思いを共有し、子ども達のためにできることを共に考えていきたいと思えます。貴重な会に参加させていただいたこと感謝いたします。

コロナ前と現在の状況

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 伊波 邦子

当院は大人と子供の混合病院で県内唯一のこども病院です。開院は2016年4月で今年17年目です。「子供から大人まで大切な命を守り県民に貢献する病院を理念に掲げ、基本方針の1つに「ボランティアを積極的に受け入れること」をあげています。病床数は468床のうち小児は124床です。ボランティアの概要ですが病院開院とほぼ同時にボランティア活動がスタートなので17年目となります。登録数は9月現在58名。主な活動は生育支援・病院からの依頼・自主活動などあります。当院のボランティアは1年間病院長から委嘱されて活動をします。委嘱状授与式の際には年間百時間活動された方に感謝状を差し上げています。活動紹介としては外来や病棟のプレイルームでの遊びの見守り 一時あずかり、絵本の読み聞かせ・時にはおもちゃ広場を開催したり、夏休みには兄弟工作等もおこなっていました。また保育とコラボして毎月イベントを行っています。イベントはその全てにボランティアが関わっています。例えば、ひな祭り。当日は女の子に着物でおしゃれしてもらいひな壇の前で記念撮影します。プレゼント作成・着物の貸し出し・着付けなどもボランティアが担当します。イベントに参加できないNICUやPICUの子供たちにはひな人形をプレゼントします。コロナ禍の今は以前のようにできませんが、工夫して子供たちのためにイベントを継続するようにしています。

このほか、たとえば先月の「夏まつり」は、各病棟単位で実施しました。プレイルームにゲームコーナーを作った親子1組づつを迎えて、ゲームを楽しみ景品やお菓子をもらって、お祭り気分を味わってもらいました。この他最近看護部からの依頼も増えてきました。カバーや子供たちの帽子の縫い物・子供のヘアークットの依頼等もありました。これらの依頼の窓口はコーディネーターです。残念ながら3年前から休止の状態、ボランティア活動の現場は制限のある場所もあります。また、自宅での持ち帰りやボランティア室で人数を制限するなどの工夫もしながら(写真)継続していただいております。他の団体の現状を伺いますと沖縄はまだ活動が出来る方ではないかと思えます。それは病院の考えに頂いた副院長先生の声も次に紹介させていただきます。



ボランティア活動は不要・不急か

南部医療センター・こども医療センター 副院長 福里吉充

そのうちおさまるだろうとの楽観的な希望とは裏腹に、このコロナ禍、もう3年目となりました。現在、第7波の真只中です。このコロナ禍の期間、常に自分に問いかけてきた言葉があります。それは、「ボランティア活動は、不要不急なのか」という問いです。これは、コーディネーターの伊波さんから投げかけられた言葉でもあります。この問いに対して、「ボランティア活動は、不要不急ではない」と答え続けることが、委員長としての使命だと思ひ、ボランティア活動継続に「ゴー・サイン」を出し続けてきました。ただ、この「ゴー・サイン」は、従来のボランティア活動に比べると制限・制約の多いものとなりました。特に、病棟での活動は、まだ厳しく制限されています。人数と時間の制限があります。これは、皆さんの活動意欲を削ぐような理不尽なものです。このような過酷な条件にもひるむことなく、ボランティアの皆さんが、強い情熱を持って活動しているという話を聞きます。その度に、「ボランティア活動は、不要不急ではない」という判断は間違っていないという思いが強くなります。

「歴史上、終わらなかったパンデミックはない」と言われています。その言葉通り、パンデミックは、必ず終わります。その日を信じ、「ボランティア活動は、不要不急ではない」という強い信念のもとに、ボランティア活動を続けていきたいと思います。ボランティアの皆さんの健康をお祈りしています。

総合病院の小児病棟の現状

総合病院小児病棟看護師 A

「看護師からみたコロナ禍における小児病棟の現状」

本日はコロナ禍における小児病棟で、子どもはどんな状況にいるのか、それを看護師たちはどう感じているか、ということをお話しさせていただきます。ボランティアのみなさまにおかれましては、ほとんど小児病棟での活動が制限されている状況にあると思います。このことは、活動再開となる場合に、現場のスタッフと新しく関係性を再構築しないといけない状況になるかと推測します。

変化について、明らかになっていることを点あげてみます。「1点目は、鳥インフルエンザやSARSなど過去のパンデミックにおける子どもと家族の変化です。それによると社会的孤立や隔離は、子どもの不安、PTSD、恐怖に負の影響を及ぼすことが明らかになっています。2点目は、あるアメリカの大学の病棟の面会制限の影響の調査結果で、面会制限によって病棟に対する対処能力が低下し、さらに親の対処能力も低下したとことです。これらを参考にしますと、コロナ対策によって、小児病棟の子どもたちは、「精神的に不安定」になり、「対処能力(がんばり方を知っている、がんばれること)が低下」することが考えられます。私の臨床での実感では、思春期以降の子どもたちへ睡眠薬の処方が多くなっている、「不眠症」も増えているのではと考えます。これらの原因となっているコロナ対策での環境の変化を整理すると、「家族の面会制限」、「医療者以外(ボランティアや訪問学級の先生や実習生)の入棟制限」、そして、看護師も感染するため相対的な「看護師の業務量の増加」の3点があげられます。これらの原因と子どもたちの変化という結果の間にながら起きているのかを考えていきます。小児病棟の現状は、①子どもへの関わり量の減少、と②子どもへの関わり量の低下のふたつに分けて考えられるのかと考えました。

まず①関わり量の減少は、子どもが孤立しやすいつながると考えます。面会制限で子どもに関われるのは看護師が中心です。コロナ前だと面会時の家族が食事の介助や歯磨き、「ママがきたらお菓飲む!」とか、これらが無くなるので、看護師が子どもの全ての世話をすることになります。家族とは違うので、さぐりながら子どもと関わっていくことになり、子どもとかみあうまで時間がかかります。これも看護師の業務量の増加につながり、子どもたちに関わる量は減ります。これによって、子どもは孤独を抱えやすくなります。次に、②関わり量の質の低下ですが、ご家族のほか生活介助以外の関わりをしていた方々(ボランティアや学校の先生、学生)がいない状況なので、関わり量の減少も相まって、子どもは自分にちゃんと関わってもらえていない感覚をもつことにつながると考えます。このため、子どもの気持ちや思いの表出や状況の理解が進んでいかないので、入院環境や治療への心の準備が進まず、状況に対する意味づけが難しくなり、不安や恐怖を感じたりががんばる力が発揮できなくなるという結果につながっているのではないかと考えました。看護師たちは不安でナースコールをたくさん押ししてしまう子どもをそばになるべくいろいろな奮闘していますが、後手後手になって、根本的な解決にはなっていないと思います。仕事の量は増えたのに、質が下がっている、という実感があります。そして、この点がやはり専門職として認めづらい部分ですが、もう看護師だけでは対応できない状況ではない。コロナ禍を体験して改めてボランティア、学校の先生、学生等、医療者以外の方々と協働の大切さをあらためて考えさせられた次第です。